

# 晩春双ヶ丘風景

熊谷九寿

制作年：1929(昭和4)年

サイズ：53.0×65.2cm

材質：油彩、カンヴァス

所蔵：中津市木村記念美術館

1993(平成5)年中津市に寄贈される。



双ヶ丘は京都市右京区にある丘陵で、吉田兼好が居をなし随筆『徒然草』を執筆した土地として有名です。昭和3(1928)年に日本キネマ双ヶ丘撮影所が作られ、同年日活の撮影所が移転した太秦の地の近所にあたります。京都に出て絵画修業と共に日活で映画の仕事も始めた熊谷は、そんな事も手伝ってこの土地を歩き絵にしたのかも知れません。

色を抑えた画面には、荒いタッチで風景が描き出されています。この絵が一見して眼の前にある風景をそのまま忠実に写し取り、写生的に描こうとしたものではない事がうかがえます。この絵についてとみられる記述があります。「いま、熊谷氏の画室では、高い所に処女作の「双ヶ岡」がかけられている(中略)作品はフォーヴのように荒く、南画のように動いている。(中略)それは眼で見る魅力を描くのではなく、身体で意識する力というものを強引に画面に打ちつけている。それは期せずして一つの表現に相通じるわけであるが、その野生と生な力は、およそつよく作家の体質を語っている。」(田近憲三「熊谷九寿」(『熊谷九寿画集1』(1967年)解説))「フォーヴ」のようで、「南画」のようだと評されたこの作品は、熊谷がその画業の初期から表現主義的なもの、自己の内面に湧き上がるものの表現を目指していた事を示しており、興味深いものです。

上の言葉ではこの作品が「処女作」とされていますが、個人蔵の「小生中学校の処女作也(大正拾四年)」と裏に書かれた「大貞公園」(中津市の公園)の絵が存在します。ただ、この「双ヶ丘風景」は熊谷のごく初期の作風を知る上で重要なものといえるでしょう。